

大学選びにおける評価基準に関する研究

後藤 正幸 研究室

0332041 浦島 範子

1. 研究背景と目的

少子化が進む近年の日本において、大学受験の年齢にあたる 18 歳人口の減少が続いている。受験生の絶対数が減少する一方、現役高校生の大学志願率は上昇傾向にあり、平成 18 年度には 49.3%と過去最高に達した。進学意識が高まる中、平成 19 年度には入学志願者数と入学定員数が同数となり大学全入時代を迎える。しかし、これはあくまで大学市場全体での話であり、実際には定員割れを起こす大学と志願者数を保持する大学とに二極化する事が予想されている。

この二極化の状況の中で、特に定員割れを起こすような大学にとっては、志願者が大学を選ぶ際にどのような点を重視しているかを知ることが、志願者数を保持する為に重要となってくる。高校生や大学生が大学を選ぶ際の評価基準については、多くの調査や研究がなされている。しかし、こうした研究では、調査対象を高校生や大学生等、受験生本人に的を絞っており、大学選びの際に学生の考えに影響を与えと考えられる家族や知人等、志願者の周りの社会人の見方や考え方については、あまり考慮されていない。また、理系・文系といった分野別や男女別といった属性による差異についても、議論の余地がある。そこで本研究では、受験の当事者である学生だけでなく、社会人も含めて分析を行い、学生・社会人、性別、志望分野といった属性と大学選びの際に着目する評価基準の関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2-1.WEB アンケートの作成

本研究では大学選択時における重視基準に関するアンケート調査を実施し、アンケートから得られた回答を比較・分析するため、2 つの方法を用い研究を進めていく。アンケート調査の対象者は学生に限定せず、様々な属性を持つ人々とするため、WEB アンケートを作成した。

WEB アンケートは、教育面、生活面、規模の面といった大学選びの基準となりうる項目全 40 問からなる。質問に対する回答は「非常に重視する」から「重視しない」の 5 件法で行うものとした。また、基本属性に志望分野について尋ねる項目を加えた。

2-2.調査概要

WEB アンケート調査は対象者を様々な属性を持つ人々とするため、大学に関するテーマを掲げた掲示板等で呼びかけを行い、2 月 1 日から 2 月 11 日までの期間で実施した。メーリングリスト等を利用した学校関係者や社会人 OB・OG への呼びかけ等も行い、11 日間で 417 件の回答が得られた。有効回答数は 337 件で内訳は男性 228 名、女性 109 名である。志望分野別に見ると文系 92 名、理系 162 名、複合系 83 名と理系の割合が高くなっている。大学生と受験生を合わせた学生は 209 名、社会人は 128 名となった。

2-3.分析 1:志望分野別平均値による特徴の把握 表 1. 全体平均と志望分野別平均値(抜粋)

WEB アンケート調査で得られた回答から、志望分野で層別して基本統計量を算出し、得られた平均値を全体平均、他分野志望者の平均値と比較し、志望分野別の重視基準の特徴や傾向、関心の持ち方について考察する。

2-4.分析 2:主成分分析

WEB アンケートの質問全 40 問を対象に主成分分析を行う。各質問項目の間に見られる相関から新たな成分を抽出し、大学選びにおける潜在的評価基準を求め、層別によって差異を考察する。

3. 分析結果

3-1.志望分野別特徴の把握

WEB アンケート調査で得られた

変数名	全体平均	平均値			全体平均との差		
		理系	文系	複合系	理系	文系	複合系
2.教育内容への興味	0.967	0.883	1.011	1.084	-0.085	0.043	0.117
7.コンピュータ設備の充実度	0.294	0.438	-0.120	0.470	0.145	-0.413	0.176
10.大学院の有無	-0.638	-0.327	-0.967	-0.880	0.311	-0.329	-0.242
11.大学院進学率	-0.905	-0.661	-1.163	-1.096	0.245	-0.258	-0.191
12.研究費の多さ	-0.831	-0.667	-1.000	-0.964	0.164	-0.169	-0.133
15.在学生の質の高さ	0.410	0.358	0.804	0.072	-0.052	0.395	-0.337
16.友達作りの環境	0.181	0.173	0.446	-0.096	-0.008	0.265	-0.277
17.校風の良さ	0.736	0.735	0.946	0.506	-0.001	0.210	-0.230
19.著名な卒業生の存在	-0.662	-0.599	-0.500	-0.964	0.063	0.162	-0.302
20.卒業生の出世度	0.113	0.272	0.152	-0.241	0.159	0.039	-0.354
21.周囲の環境の良さ	0.843	0.840	1.033	0.639	-0.003	0.190	-0.204
22.通いやすさ	0.745	0.605	1.130	0.590	-0.140	0.386	-0.154
25.キャンパスの広さ	-0.122	-0.056	-0.054	-0.325	0.066	0.067	-0.204
30.教授の知名度	-0.543	-0.426	-0.554	-0.759	0.117	-0.011	-0.216
31.スポーツの強さ	-1.107	-1.124	-1.054	-1.133	-0.017	0.053	-0.026
32.就職率の高さ	0.855	0.957	0.772	0.747	0.102	-0.083	-0.108
33.優良企業への就職実績	0.564	0.710	0.500	0.349	0.146	-0.064	-0.214
34.資格の取りやすさ	0.024	0.043	0.174	-0.181	0.020	0.150	-0.204
39.入試科目/形態	0.991	0.920	1.011	1.108	-0.071	0.020	0.117
40.学費の安さ	0.080	0.117	0.380	-0.325	0.037	0.300	-0.405

有効回答 337 件について、志望分野別に算出した平均値と全体平均、全体平均との差は表 1 の通りである。

分野別に見ると、理系では特に目立った値をとる変数が見られなかったが、就職率の高さに関して一番大きな値を示した。文系に関しては環境の良さや通いやすさといった、地域の面で高い値を取る変数が見られた。

また、文系と複合系両方に共通する特徴として、教育内容への興味、入試に関する変数において高い値を、またそれとは逆に進学、研究に関する変数については低い値を示す傾向が見られる。更に理系、文系、複合系の 3 グループに共通して、スポーツの強さに関する変数は低い値を示した。

全体平均との差で見えていくと、理系は大学院への進学に関する変数で、全体平均との間に大きな差が見られた。文系では学校設備や進学、友達作りの環境などの生活面、学費の安さといった変数で全体平均との間に大きな差が見られた。また複合系においては全体的に負の値を示している項目が多い。

3-2.主成分分析による大学選びの評価基準の抽出

主成分分析を行った結果、表 2 の固有値が得られた。寄与率を見ると主成分 1 から主成分 5 までの間で累積寄与率が 0.51 となり、全体変動の約半分を説明できることが分かった。このことから、固有ベクトルに基づく主成分 1 から主成分 5 までの各成分の意味付けを行なった。主成分 1 は、全ての項目の因子負荷量が正となり、「評価項目全体重視度」と意味付けた。主成分 2 については「偏差値の高さ」と「入試倍率」といった変数の因子負荷量が高いことから、主成分 2 を「入試学力レベル重視度」と意味付けた。以下同様に主成分 3 は「教育・生活環境重視度」、主成分 4 は「立地条件重視度」、主成分 5 は「入学試験重視度」と意味付けることができた。これら 5 つの主成分を大学選びの際の潜在的評価基準とする。以下に、属性によって層別した各主成分の平均値と標準偏差を示す。

表 2 . 主成分分析の結果

No	固有値	寄与率	累積寄与率
1	10.371	0.259	0.259
2	3.658	0.091	0.351
3	2.305	0.058	0.408
4	2.094	0.052	0.461
5	1.971	0.049	0.510
6	1.623	0.041	0.051

表 3 . 属性別による主成分の平均値と標準偏差

変数名	理系		文系		複合系		学生		社会人	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
主成分1	0.054	0.987	0.060	0.917	-0.173	1.101	-0.111	0.968	0.181	1.029
主成分2	-0.123	0.966	0.265	1.140	-0.054	0.844	0.022	1.013	-0.037	0.982
主成分3	-0.081	1.028	0.073	1.013	0.077	0.926	0.071	1.033	-0.116	0.937
主成分4	-0.028	0.962	0.100	1.067	-0.056	1.001	-0.083	0.992	0.135	1.002
主成分5	-0.140	1.102	0.046	0.910	0.222	0.838	-0.022	1.048	0.037	0.918

4. 考察

4-1. 志望分野別平均値による特徴の把握に関する考察

志望分野別の平均値と全体平均との差を算出し、平均値の比較や特徴の把握を行った結果、志望分野の違いによって、大学選択の際の評価基準には以下の様な特徴が見られた。

1) 理系

- ・全項目の中で「就職率の高さ」を最も重視し、また文系・複合系よりも「大学院」を重視している傾向がある。
- ・全体的に文系・複合系よりも重視項目数が少なく、特に意識して評価する項目があるわけではない。

2) 文系

- ・平均値が正の値を取る項目、負の値を取る項目が分かれた。
- ・「教育内容」、「地域面」、「入試科目」の評価項目を重視する傾向がある。
- ・複合系と共通した値を取る項目がいくつか見られる。

3) 複合系

- ・全体的に理系・文系よりも、各項目の重視度が低い。

4-2. 主成分分析による大学選びの評価基準の抽出に関する考察

主成分分析を行った結果、全データの変動の約半分が、「評価項目全体重視度」、「入試学力レベル重視度」、「教育・生活環境重視度」、「立地条件重視度」、「入学試験重視度」の 5 つの基準により説明できることが明らかとなった。従って、これら 5 つの成分は大学選びにおける評価基準を考える上で有効であると言える。また、属性によって層別した主成分得点の平均値(表 3)より、文系が「入試学力レベル重視度」が高く、複合系は「評価項目全体重視度」が低く、「入学試験重視度」が高いことがわかる。また、学生は評価項目を絞って重視する傾向があるが、社会人は評価項目全体をバランスよく見渡して考える傾向があると言える。

5. 結論と今後の課題

本研究では、大学選びにおける評価基準について、被験者属性で層別して特徴の把握を行った。また、教育、研究、規模等の 10 分類 40 項目の変数を用いて、主成分分析を行い大学選びにおける潜在的評価基準の抽出を行った。その結果、志望分野別、学生・社会人別で、大学選びの基準が異なることが明らかとなった。特に理系・文系・複合系による評価項目の特徴は異なり、分野によってアピールすべきポイントを変える必要がある。属性別の特徴を把握することにより、適切な広報の方法の提案に結びつくと考えられる。